

勝承夫詩集

上卷

勝承夫詩集 上卷

勝 承夫詩集 上卷

定價一二、〇〇〇円（上下共）

昭和五十六年十二月十日 發行

編輯者 日新印刷株式會社 委員

印刷所 荒木製本株式會社

製本所 株式會社 竹尾

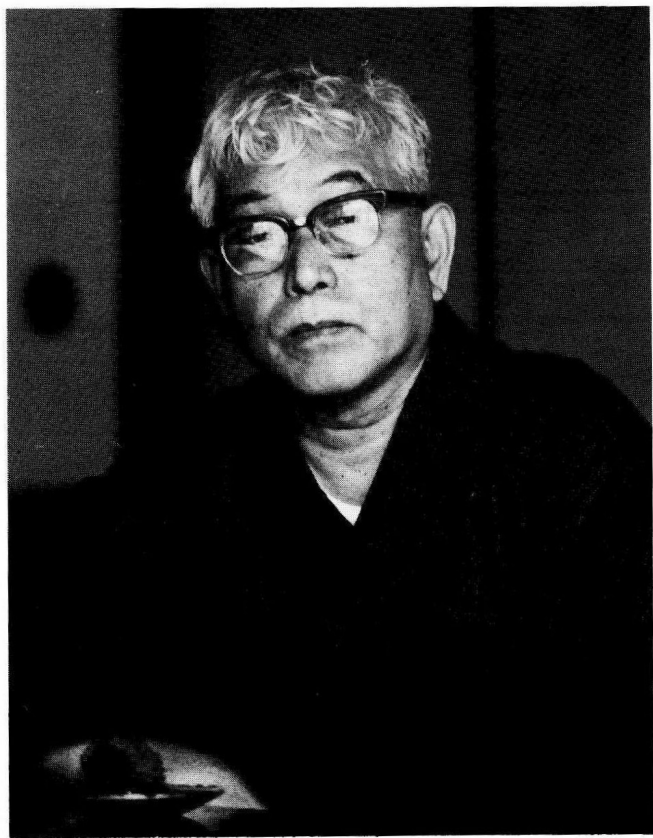
用紙 株式會社 竹尾

發行所 勝 承夫詩集刊行會

113 東京都文京區本駒込一一〇一二

南水會館 〇三一九四一九五六

©勝 芳江 一九八一



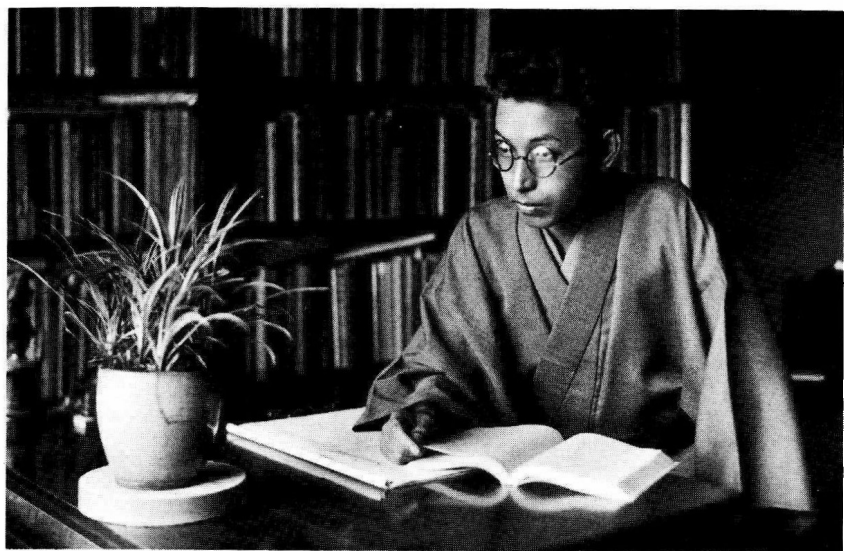


左, 明治40年頃, 母・兄・姉と
下, 明治41年, 小学校1年
(前列右から5番目)





上、大正10年『惑星』の出版記念会
 (前列左から井上康文、内藤鑑策、勝承夫、
 正富汪洋、白鳥省吾、室生犀星、南江二郎)
 下、大正11年頃、東洋大学在学中
 左、大正5年夏、中学の同期生と
 (後列左から3番目)



上，昭和15年，書齋にて
下，昭和5年，長男誕生





上, 昭和25年, 関東インカレで母校陸
上部の学生と (朝日生命グラウンド)
下, 昭和24年頃, 自宅にて



ふたつ月かぢ

空にさえて

長冬の暮

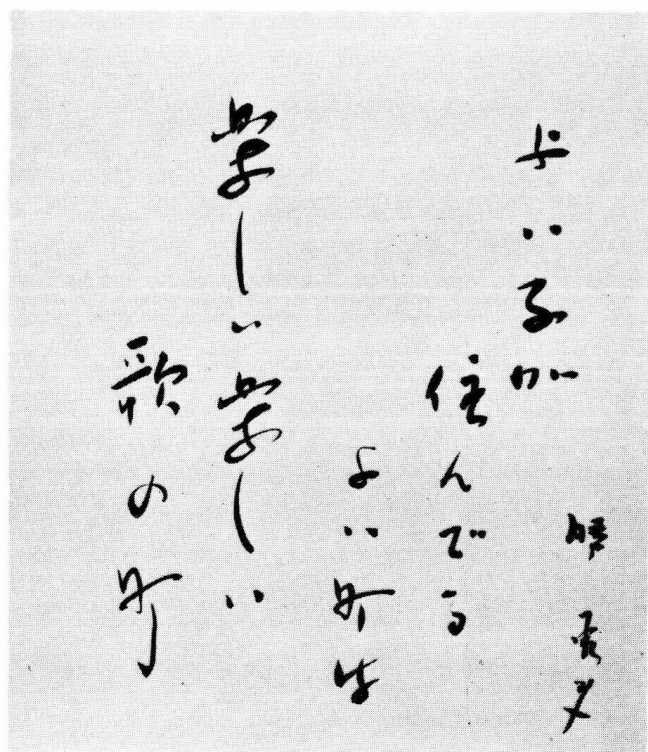
あまのこ

鎌倉の二部

あま

著者筆蹟





上，著者筆蹟（宮本光真氏蔵）
下，昭和25年頃，清州橋にて





はし
が
き

勝承夫先生は東洋大学在学中に、宵島俊吉の筆名をもって大正期詩壇に登場、爾来、半世紀を超える詩歴の中で、穎才と清澄な抒情性とによって独自の詩風を形成された詩人である。その詩藻は、いわゆる抒情詩だけに留まるのみでなく、一千篇に近い校歌・社歌を初め、唱歌・童謡・組曲にも及んでいる。それらの詩業の一端は、これまでに五冊の詩集、数冊の合同詩集となって世に問われたが、さらに先生の筐底には未刊詩篇も数多く蔵されている。

先生はまた、母校東洋大学をこよなく愛され、困難な時期の大学理事長、校友会会長等を歴任、大学発展の基礎作りに限らない努力を傾けられ、一方、社団法人日本音楽著作権協会会長、詩と音楽の協会会長として、音楽文

化の維持向上に貢献されたことは、つとに衆知のところである。

ここに先生の詩業を慕うもの相集まり、勝承夫詩集刊行会を結成し、その詩業を集成することになり、その趣旨を公表したところ、幸い多数の御理解と御賛同を戴くことができた。

刊行会は、八名からなる編集委員会を構成し、編集委員は原詩集の収集、校訂、未刊詩篇の整理、校歌、社歌の調査等に従事した。それには意外なほどの時間と努力を必要としたが、幸い篤志家の寄付のほか、東洋大学井上圓了記念学術振興基金の交付にも預り、所期の目的を違漏なく進めることのできたことは、なによりも有難いことであった。

先生は詩集の上梓を千秋の思いで待ち望んでおられたと思うが、上巻部分が組版にかかった昭和五十六年八月三日、宿痼の胃がんのために逝去された。完成を見ないで逝かれた

ことは、先生にとっても、刊行会にとっても残念なことではあるが、生前、校正刷の一部をお目にかけることができたことが、せめてもの幸いである。

最後に、刊行会の運営や出版に際して、多くの人びとの協力を頂いたことに対して、深甚なる謝意を表するものである。

昭和五十六年十一月

勝 承夫詩集刊行会

発起人代表

柳井幸太郎（東洋大学理事長）

磯村英一（東洋大学学長）

青木平三郎（東洋大学校友会会長）

吉田二郎（東洋大学父兄会会長）

平井康三郎（詩と音楽の会代表・作曲家）

協賛者代表

服部良一（日本音楽著作権協会会長）

石井春水（日本音楽著作権協会常務理事・理事長代行）

編集委員（五十音順）

伊賀上茂

上田高昭

大瀧貞一

神作光一

塚田晃信

広島一雄

藤井一雄

水澤清之

上卷目次

はしがき……………(九)
惑星……………(一五)
朝の微風……………(四九)
深夜の犬……………(七五)
白い馬……………(四三)
解説……………(四四)

